

せん。勝敗は兵時の常と思う年ごろになりました。しかし、シベリア抑留だけは許せませんね。何と言って戦争のない日本はいいですよ。子、孫にもこの体験を語り継ぎたいと思います。

## 郷党の模範となれ

### 近歩第二連隊

岐阜県 小林 仁平

近衛師団は皇室を守る

昭和十五年、紀元二六〇〇年記念の日、徴兵検査を受けた。高山で三五〇人のうち甲種合格は百人、十月、昭和十六年一月十六日東部第三部隊へ入隊せよと役場から令状が届いた。高山の人たちに聞いたが、ほとんどが岐阜の連隊か海軍で、東部三部隊は私一人、しかしこの部隊が近衛歩兵第二連隊とは分からないから、一人だけが東京とは、「これはよわった」と思ったが、場所は麴町区代官町と書いてある。調べてもらったら、

どうも近衛師団らしい。

大正九年四月九日、私は高山で生まれ、お陰でそれなりの教育を受けさせてもらったが近衛師団とは。全国の選りすぐりの兵隊が多いとも言われ、これは大変なことだと、柔剣道を更に習ったり、急ごしらえで勅諭を覚え、作戦要務令や歩兵操典の暗記をしたりして、内心びっくりしていた。

高山では市長が全員を岐阜の連隊へ連れていくというが、私一人は、宮村の一人と一緒に宮村村長が預かって東京へ行った。東京の道路はアスファルト道路で、これが何里も続いている。ネオンもついているし物は豊富にある。東京は偉い所だ、やっぱり都だと思った。一日は父の遠縁の家に泊まり、入営前日は神田の指定された宿へ泊まる。村長は私たちと営門に入り、服や着物を持って帰っていった。

これで我々は兵隊となる。配属は第一大隊第三中隊であるが、当時の近歩第二連隊は現在の武道館の所であり営門は江戸時代からある田安門である。初年兵は六個班に分けられて、第一・二・三班は一般小銃、第

四班擲弾筒、第五・六班は軽機関銃である。私は軽機  
班で銃は九九式であった。

歩兵としての訓練は普通の歩兵基本訓練であり、内  
務班の生活もどこの軍隊とも同じように厳しかった。  
しかし近衛は変化のない厳しさだった。一般教練も、  
銃剣術もやった。特に銃剣術は強かった。朝から夕方  
までやった。日常の演習は遠くへ行くことは少ない。  
射撃は大久保の三百メートルのドーム式射撃場。一般  
教育の一期検閲は代々木の練兵場でした。

三カ月の検閲が終わると近衛本来の教育である。守  
則の教育です。大宮御所七〜八カ所、宮城に十四カ所  
ほど、それぞれ勤務の守則が違う。この違う守則は全  
部暗記し動作も修得しなければならぬ。どこへ立哨  
してもよいように教育を受けねばならない。私もせっ  
かく飛驒から出て来たのだからと、一所懸命やった。  
入営前七〜八キロあった体重が五六キロに下がってそれ  
以上増えない。肉体的だけでなく精神的な厳しさのた  
めだったと思う。守則の検閲が終わると、御守衛が始  
まる。自分の第二連隊の衛兵ではなく宮城や大宮御所

の守衛である。

いろいろなことを想定して全部教育を受ける。どこ  
の守則を、どこの守則は、と問われる。覚えられない  
人もあったが、だんだんに覚えた。検閲が受からなか  
ったら大変である。近衛の人は素質の良い人が多いと  
言われてはいた。私たちは平均的なことだが学校も出  
してもらったので、中にはこの人はどうしてという人  
もいた。どうしてこういう人を推薦したかと思う人も  
いた。しかし、何とか合格しなければと懸命である。  
したがって体重は減るし、増えなかつたのだと思う。

近衛は変化のない厳しさと前にも申ししたが、体だけ  
の苦労でもなく、ピンタを取られる単純な苦労ではな  
い、近衛兵としての御守衛を過誤なく全うするという  
精神的苦労が常に負いかぶさっているからであろう。

それでは一般訓練はどうであったか、一カ月に一度  
ぐらゐは千葉県の下志津や習志野へ徒歩で演習に行く、  
列車でなく徒歩である。装具は完全軍装、演習場は芋  
も取れない笹っ原で、一雨降れば赤土で滑る。私は軽  
機関銃だから、小銃より、擲弾筒より重いのを担いで

歩く、助教や助手の教育は厳しい。

内務班で、近衛の服装は他部隊と比較すると良い。

しかし、襟布などちよっと汚れていたら外出はできない。髪は演習の時は別だが剃らねば外出は許可されない。

川崎の溝の口へ演習に行くこともあるが、もちろん徒歩である。田園調布を通って行くが、榎木林だった武蔵野である。今は高級住宅地となっていて妹が住んでいるが全然見当がつかない。であるから「田園調布という所は榎林だと思っていた」というと笑われるけれど。五十年前の東京も川崎も横浜も皆変わってしまったわけである。

近衛という所は心身共に他とは違った苦勞も多いし、任務も重いことを入隊して知った。私が入営した時は軍旗は仏印に行っていて第二連隊は留守部隊だった。

昭和十六年四月、一期の検閲が終わるか終わらぬうちに部隊（桜田兵団とし南支で戦い仏印へも進駐）は帰って来た。我々は補充隊の二年兵にしかられていたのが、戦地から三年兵が帰って来て、三年兵が二年兵を

叱る。我々初年兵はいる所がないのでえらかった。

我々が入隊する以前に二・二六事件があり、思想的には相当過敏だったようだ。非常呼集があると二・二六事件のことが出て、兵器・弾薬など検査が厳しかった。我々の仲間で補助憲兵になった者がいて、時々隊へ帰って来るが、連隊内部の動きなどをそれとなく調べていたようである。

近衛の兵は思想的には健全な者だけで、率先して社会を良くしようという人ばかりであった。近衛師団は皇室を守ることが任務であって、いかなる人からも挑発されるな、と厳しく言われていた。軍司令官から命令が出て近衛師団は動かないぞと、「天皇を守るためにやるんだ」と厳しく教えられていた。中国の「毛語録」みたいなものであって、徹底して言われた。兵にそういう教育をやったので一部の将校には厳しかったと思う。

青年将校からはいろいろ言われました。「戦争がこんな貧弱なやり方ではダンガン（不可）、もっと積極的にやらにやいかん」と檄を飛ばしている将校もいた。

大東亜戦争が始まった時は二年兵になる時だった。

「今朝戦争が始まった」と集合がかけられた。非常呼集ではなく、朝食前「大本営発表」が知らされた。

師団長は堀の土手に兵を全部配備したが一〜二日で止められた。兵営の外側、宮城の兵力を増強した。「御門演習」といって爆撃されてもいように宮城の中に大きな防空壕を、師団の兵が夜間、手で掘った。土はトラックで運び出し、それを地下壕とし鉄筋コンクリートで建設した。一トン爆弾が落ちても崩れぬということである。近衛連隊と皇居を、竹橋、乾門の所で通じ、その道路入り口はコンクリートで閉じるという突貫工事だった。

昭和十七年四月十八日、第一回の本土空襲の折、私が見たのは低空で双発の飛行機（米軍のB25）が一機だけ飛んで行った。爆弾は落とさなかったので、空中写真を取っていったのではないかと言っていた。その後空襲は全然なかったが、連隊の中に蝸壺も掘ったが高射砲は備えなかったようだった。

我々は機関銃をもって訓練したが、効果があるのか

どうか分からない。B25や戦闘機などは撃っても高度を飛ぶ大型爆撃機には無理なのではと思っていた。そのうち、近歩第二連隊でも補充部隊のように、召集兵が入ったり、連隊から将校や下士官が特別近衛連隊と、このを編制して外地へ行った部隊もあったようだし、十八、十九年、東京で大々的召集があり、入隊した補充兵を見ると兵隊の体格は貧弱だし、年齢も多い、それらの兵を一、二カ月教育して出して行った。被服も下着から鯨よけの長い禪まで準備して持たせてやった。二年兵以後は、宮城勤務、初年兵助手、中隊長伝令のとき、体の弱い兵隊の特別訓練隊ができ、教育助手となったが、胸部疾患の者もあり、教官からは、軍律だけはしっかり教え、無理をさせぬようにとの教育方針での教育だった。その後大隊長伝令もしたが大隊長はサイパンへ行かれた。

私が初年兵の時には心身共に、内務でも訓練でも行軍でも徹底的に鍛えられた。その上、宮城、大宮御所などの御守衛と守則教育、息を抜くことのできない勤務・教育だったので、これに付いて行けない兵隊もい

て清水門から逃げ出した者も一人おり、精神が侵され気が狂った者もいた。

しかし、皇居を守るといふ特殊な任務を持ち、プライドを堅持しての毎日であった。観兵式は昭和十六年から十九年まで四回体験したが、分列行進の演習の時はそろわぬと連隊長に怒られるが、天皇陛下が出られると割箸をそろえたように「抜刀隊」の吹奏に合わせキチンと行進ができた。

特に昭和十九年四月には、万一空襲があつてはと悲壮なまでに、内心戦戦兢兢たるものであった。航空機も動員され無事に終了したとき、我々近歩の兵としても安堵したものである。

昭和十九年十一月二十五日、私も五年兵になるといふとき、凶らずも除隊となる。近衛の定員制は他部隊と異なり厳しいものであり、私たちも進級、任官がそのため遅れた者が多い。そのため志願、他への転属を願った者は、早く下士官になった者もいた。私は任官もしているため召集解除となり、一晚東京に泊まり翌日、飛驒高山へ帰った。ところが、二十九日、東京は

夜間空襲により市街地は焼夷弾により焼失した。これがB29による大々的空襲の第一弾であった。

その後、高山で青年学校、中学校、実業学校の銃剣術（二段）教官をし、後、本土防衛のため、九州川内の第三〇三師団（高師）へ応召、「お前は若いから挺進遊撃隊へ入れ」と命ぜられ、敵上陸せば特攻挺進の任務を受けたが八月十五日終戦となる。しかし、忘れることのできぬことは、近衛連隊除隊の折の芳賀隊長の「また召集が来ると思うが、郷党の模範となつて祖国を復興せよ」という言葉である。この言葉を忘れず今日まで私は守っている。

### 船舶兵として千島勤務

### 昭和二十三年樺太留置

長崎県 諸 田 幾 男

大正十三年十一月七日、島原市で漁業を営む家で生まれ、十九年徴集で甲種合格した。父母は健在、長兄